

補習校だより

2018年11月21日発行



ひとしきり雨が続いたあと空がすっきりと晴れ、雪化粧したアルボルズ山脈が見られるようになってきました。アーザル月は、イランの秋の最後の月。つかの間の太陽の暖かさを感じられる時間も、今月末のシャベヤルダー（冬至のお祝い）に向けて短くなっていくのかと思うと、少し寂しい気がします。

日本はもうすぐ師走（しわす）、年末が近づいています。補習校内でも楽しみにしているイベント「公開授業とバザー」も開催まであと2週間ほどです。保護者は準備がいろいろありますが、今年も盛り上げていきましょう！

今月（アーザル月）の予定

	イラン暦	西 暦	
第 8 回目授業	1397/9/1 パンジシャンベ	2018/11/22(木)	通常授業
第 9 回目授業	9/8 パンジシャンベ	11/29(木)	通常授業
第 10 回目授業	9/15 パンジシャンベ	12/6(木)	公開授業・バザー
第 11 回目授業	9/22 パンジシャンベ	12/13(木)	通常授業
第 12 回目授業	9/29 パンジシャンベ	12/20(木)	通常授業

※第 10 回目授業は、短縮授業になります。



交流授業行事参加報告

教員 長谷川可奈子

先日の11月1日(木)に、第3回テヘラン日本人学校とテヘラン日本語補習授業校の交流授業が行われました。

補習校の生徒達がまず言っていた感想は、「日本の学校の先生は、なんて優しいのだろう!!」「こんな授業なら、絶対この教科が好きになる。」などでした。

かなり普段受けているイランの学校の授業と様子が違っていたようです。私も授業を見学させていただき、補習校の生徒の為に先生方が、かなり気を配ってくださっている様子が、とてもよく伝わってきました。

野手先生は授業に入る前に、「算数は好きですか?」「お寿司は食べたことがある?」など子供達に質問し、そのお陰で補習校の子供達は、緊張せずに授業を楽しみながら受けることができました。一人の生徒は、先生が「間違えることも大切なんだよ。」と教えてくれ、「安心して授業に参加できた」と言っていました。

皿谷先生の授業では「オノマトペ」(擬声語)を勉強し、「イランの場合はこの様子はどのように言うのかな?」と比べながらの授業で、両校の生徒同士と一緒に考えながら授業を受けることができました。

那須先生の理科は、中学生と小学生が混ざりながらの授業で、幅の広い年齢での授業はさぞ難しいだろうと思っていたのですが、どの子も興味が持てる“スライム作り”で、生徒達は大喜びでした。イランの学校では、あまり理科で実験をする機会が少ないので、「実験」と聞くだけでワクワクするようでした。

また教員にとっても、とても勉強になり、刺激を受けた授業でした。

小口先生の楽器を使って擬音語を考える授業は、こんなふうにカタカナを覚えたら楽しいものだろうと、とても新鮮で驚きました。

亀山校長と北村先生の国語の音読では、ふつうの音読と違う、リズム感を大切にしながら、複数名で情感豊かに表現をする、群読という音読の楽しみ方を知りました。

どの授業も日頃忙しい日本人学校の先生方が、この日の為にいろいろと工夫をし、授業を用意して下さったのが伝わる授業でした。

日本人学校の先生方に、心から感謝申し上げます。

その後の1時間は補習校側が用意したレクリエーションを行いました。補習校生も日本人学校生も一緒に、小学一年生から中学生まで、幅広い年齢層が理解でき、楽しめる内容を考えるのはなかなか大変で、補習校保護者もかなり考えました。

あっという間の時間でした。授業も、レクリエーションも「もうちょっとやりたかった」と感じるほど、充実した交流授業でした。

イランに住みながら、補習校生も教員も日本の学校を体験できた貴重な一日でした。また、今後も日本人学校と補習校との交流が続くことを切に願います。

☆作文紹介☆

補習校の1年生も授業に参加しましたが、まだ作文を書いたことがないので、今回は2年生以上の授業からの作文になります。

○2年生国語

「みんなといっしょ」 青山あいさ

わたしは、十一月一日に日本人学校の交りゅうじゅぎょうに行きました。

日本人学校の二年生のお友だちと同じじゅぎょうが学べてうれしかったです。なぜかというと、同じ年の女の子がいたからです。

二年生の小口先生のクラスでカタカナで書く言葉を教えてもらいました。日本人学校では、楽つきをつかってカタカナの音をしょうかいしてくれました。はじめてきく音があつてとてもおもしろかったです。

そして、すきな楽つきの名前をつかって文章を作りました。そうしたら先生が、

「とてもいねいに書けました。」とほめてくれました。じょうずだねと花丸をとばしてくれました。わたしは、心の中で本当に花丸がとんでくるのをそうぞうし、しっかりとけとめようとしたのですが、しっぱいしました。

またこんども日本人学校でみんなといっしょにじゅぎょうがうけたいです。よろしくおねがいします。



○3, 4年生国語

「日本人学校へ行って」 田中良杏

日本人学校での四年生は国語の授業で音のことをやりました。その言葉の音をオノマトペといいます。例えば、(めえめえ)は何の音か。それはペルシャ語で何になるのか。楽しい授業でした。

遊びの中で一番おもしろかったのは、伝達ゲームでした。なぜなら伝えていくうちにおもしろい言葉になることがあるからです。

もっとゲームがやりたかったです。

「日本人学校交流じゅ業」 長谷川アナヒタ

わたしは、今年日本人学校の交流じゅ業に行きました。私が入ったクラスは、3・4年生クラスでした。勉強とは思えないほど、ゲームばくて楽しかったです。皿谷先生のじゅ業でやった「言葉遊び」では、日本とイランでは音の使い方がちがうことに気づきました。たとえばドアをたたく音は、オノマトペでとんとん、イランではタクタクでおもしろいなど

思いました。2 時間目のじゅ業では、ほ習校が用意したゲームと、お話をしました。伝言ゲームは、すごくもり上がって楽しかったです。でもさい後まで、できなかったのがざんねんでした。もっとたくさん遊びたかったです。

「楽しい交流授業」 原 えりか

十一月一日、日本人学校とほ習校のみんなで交流授業をうけました。

わたしは3・4年生の国語の授業で皿谷先生でした。オノマトペという言葉遊びをしました。オノマトペとはピヨピヨ・むしゃむしゃ・ペロペロなど、何の音か？どんな様子を表すのか？みんなで考えてみました。

日本語はオノマトペが世界で二番目に多いそうです。

また、日本とイランでも音がちがう物がありました。例えば、ひよこの鳴き声は、にほんでは「ピヨピヨ」ですが、イランでは「ジィキジィキ」と言います。

国によって少ない国もあるし、音がちがっておもしろいと思いました。

オノマトペを使うと様子がよくわかります。これからもオノマトペを使いたいと思います。楽しかったです。ありがとうございました。



○5, 6 年生 算数

「日本人学校」 小林 紗也

ぼくは日本人学校に行っていていろいろなことを知りました。

ぼくはほ習校では三年生ですが、イランでは六年生で六年のじゅぎょうに行きました。

六年ではまほうじんのやり方をしりました。

まほうじんとは九この四角の中に一から九までの数字を四角の中におくことです。ただし、たて、よこ、ななめをたすと同じ数になるように。

じゅぎょうの後にはみんなでいろんなあそびをしました。

ぼくはその時がすごくたのしかったのでまた行きたいです。

「交流授業」 鈴木 嵐

今年も、日本人学校の交流授業に行くことができました。

ぼくは、5 年生の、野手先生による、算数のクラスに参加しました。

野手先生は、授業の最初におもしろい質問をしてくれました。例えば、「算数が好きですか？」とか、「おすしを食べたことがある？」そして「お母さんがこわい人？」という質問も聞きました。おかげでぼくたちほしゅう校のきんちょうがとれてよかったです。

算数の授業もイランの授業では教えてもらわなかった魔方陣というやり方も初めて知りました。でもとてもわかりやすく説明してくれたので楽しかったです。

「交流授業」 奥山ティナ

私は、算数の授業に参加しました。最初はゲームや自己紹介をしてとてもきんちょうしました。算数の問題は少し難しかったけれど先生がまちがえる事もいい事だと言ってくれたので安心しました。日本人学校の先生はとてもいいのでイランの先生とはちがうなと思いました。



あと、正方形や魔方陣というのを習いました。魔方陣は、とても難しかったけれど、色々な考え方があるのが分かりました。

日本人学校の子は、いつも一人でやっているけれど、今日はみんなと授業をできてよかったと言っていました。私も、きんちょうしたけれど、みんなと勉強できてとてもよかったし、日本の学校に行った事がなかったのも、とても楽しかったです。

○中学1年 国語

「交流授業の感想文」 鈴木沙奈

交流授業の前半は、校長先生の国語の授業を受けました。「竹」についての詩で、竹の生え方や竹のどの部分が地上にあって、どの部分が地下にあるかなどについての詩でした。詩に出てきたあまり使わない言葉の意味を知ることができました。

後半では、イランのカレンダーで三種類のこよみがつかわれていることは、はじめて知りました。シルクロードを二年半かけて歩いた大村一朗さんの本も読んでみたいと思いました。伝言ゲームはとてもおもしろくて、みんなもとても楽しそうにしていました。日本語とペルシャ語には、似ている意味のことわざがたくさんあることに気付きました。

今回の交流授業では、知らないことをたくさん知ることができてとても良かったです。



「日本人学校と交流授業」 鈴木まり

わたしは交流授業を前からずっと楽しみにしていました。なぜなら去年やおととの公開授業がとても楽しかったからです。

わたしは中学部一年の授業を受けました。始めに、自己紹介をして竹の詩を読みました。わたしが一番おもしろいと思ったことは、グループに分かれて竹の詩をかえるの歌のように歌ったことです。

授業が終わった後に、みんなが集まってことわざクイズと「これを知ったらイラン通クイズ」をやりました。自分が知らなかったこともあったので、とても勉強になりました。それ

から伝言ゲームをしました。伝言ゲームの最後の人の言葉が最初の人とちがっておもしろかったです。

亀山先生そして日本人学校みなさん、ありがとうございました。



○中学３年 理科

「交流授業」 鈴木愛良瑠

わたしは今年、交流授業で中学三年生クラスの理科に参加しました。先生は、なす先生でした。

わたしは、理科があまり好きではないので、ちょっと心配でしたが、でもスライム作りをすると聞いてとても嬉しくなり、なす先生の授業に参加できてよかったと

思います。

イランの友達の間でも、スライム作りはとてもはやっていて、わたしも作りたいといつも思っていました。材料も、あらかじめそろっていて、とても簡単に作ることができました。自分で作ると、材料をそろえるのも大変なのでよかったです。

なす先生はとてもやさしくて、材料の名前をペルシャ語でも、分かりやすく教えてくれました。こんな授業なら、理科も嬉しいなと思いました。

「スライム」 榊原萌里奈

十一月一日の木曜日私たちは、ほしゅう校ではなく日本人学校に交流授業に行きました。

私は、理科の実験が大好きなので実験室で実験できることがうれしくてわくわくしていました。授業が始まると先生が「今日はスライムを作ります。」と言いました。私は前にスライムを買ったことがありました。作れることを知っていたので自分で作りたいといつも思っていました。だからそれを聞いて、とてもうれしかったです。

私はスライムの固さの割合が 6%と 9%の物を作りました。色は、赤と黒を作りました。

この実験で一番おもしろかったしゅん間は、二つの物質をまぜた時でした。その時どろどろしていた物質がいきなり固くなってスライムに変化したのです。びっくりしました。

その日から毎日スライムで遊んでいます。先生、中 3 クラスのみなさんありがとうございました。

○レクリエーション

「交流授業」 田中咲良

日本人学校との交流授業がありました。授業の後、日本人学校生と補習校生の全員が集まってゲームをしたり、イランの暦のことや、イランから伝わったものの話を聞きました。

ことわざクイズは、イランのことわざを日本のことわざにするゲームでした。イランにも

色々なことわざがあつて、その中に日本語のことわざと同じものがあるのはおもしろいです。

シルクロードという長い道を、二年半かけて歩いた日本人がいるという話も聞きました。イランの学校の勉強でシルクロードのことを習っていました。その道を歩いてすごいなと思いました。通ってきた国の中で一番良かった国はイランだそうです。私はいつか自転車で旅をしたいと思っているので、シルクロードも通りたいです。



「あの人は今」

昨年まで補習校の休み時間を使って、先生や保護者の『職業体験談』を聞かせてもらってきました。子どもたちが将来の仕事を考えるきっかけになればという願いからでした。

さて今年度は新企画です。以前補習校に在籍していた方に「その後」をインタビューする『あの人は今』。今回は、6年前に補習校に在籍していたマンスリ・アリ君とお母様の咲子さんに、お話をうかがいました。



アリ君は現在、シャリフ工科大学(ダネシガイェシャリーフ、Sharif University of Technology)に入学し、コンピューターサイエンス科を専攻しています。

イラン人男子は兵役の対象年齢になる18歳が、兵役を受ける前の自由に国外へ

出るタイムリミットであるという理由もあって、今までにいた元補習校生には、その前に日本へ移った例も多いです。しかし、生活基盤がイランにある場合、家族そろって日本や第三国への移住は簡単ではないのが現状です。

そういった風潮の中でもイランで進学し、しっかりと自分の道を歩んでいる元補習校生もいます。アリ君もその一人です。将来は、人工知能の開発に携わりたいと言っていました。

ここには紹介しきれないほど、たくさんの質問が出て、彼が流暢な日本語で答える内容は、現在の補習校生とその保護者にとって身近な問題なので、皆たいへん熱心に聞いていました。

またペルシャ語を日常生活で使いつつ、日本語力を維持するために、親子の会話はすべて日本語で行っていて、ご家族もそれに協力的だったという咲子さんのお話も興味深いものでした。

ダブルのバイリンガル教育は一親一言語が鉄則ですが、それを貫くのは意外に難しいからです。核家族ではない、同居の場合は特にです。そして日本語と英語を勉強し続ける原動力になっているのは、夢である人工知能の開発をイラン国外で勉強することも視野に入れているからだそうです。

中学生以上のクラスでは授業後に、アリ君へさまざまな質問がされて、それに対して丁寧に答えてくれたそうです。彼は大学受験を終えて間もないので、「10年くらい先の自分を想像して、今何が自分に必要か考えるといい」と高校で専門科目を選択するイランの受験システムについて、アドバイスをしていました。

十代は自分の進路選択に対し、どうしたらよいのかとたいへん迷う時期ですが、彼がしっかりと自分達の少し先に行く姿は、とても頼もしく映ったのではないのでしょうか。



編集後記

補習校に長く携わったっている私ですが、今まで補習校で勉強してきた子たちが、いつの間にか立派に成長している姿を見るのは、同じ親としてとても嬉しく思います。今、一年生で初めて日本語の勉強を始めた子たちも、いずれ大きく成長していきます。まだまだ手がかかると思っている、いつの間にか自分でできるようになってゆくのでしょうか。ひとつでも多くそんな瞬間を、親子で味わっていただけたらいいですね。